

身体による「一人称的パースペクティブ」の拡張 —「二人称の科学」としての現象学—

三村 尚彦 関西大学*

Widening the First Person Perspective through the Body :
Phenomenology as a "Second Person Science"

MIMURA Naohiko

はじめに

人間の精神的な営みに対して、自然科学的な説明を用いて迫っていくことの限界は、一世紀以上前から、さまざまに指摘されてきた。量的、客観的な把握は、これまでの経験によって形作られてきた一人ひとりの体験内実を、そのものとして捉えることはできないという主張である。ディルタイ「生の解釈学」や、フッサール、メルロ＝ポンティおよびその流れをくむ一連の現象学者たちによる考察を、そうした見解の代表と見なすことができるであろう。一般に現象学は、一人称的パースペクティブによる意識記述、体験記述をおこなう哲学として規定されている。だが、こうした特徴づけは、どのような哲学的立場を採用するかによって、肯定的にも否定的にも受けとられる。人間の精神活動、心的状態を、認知科学的、脳科学的知見にもとづいて解明していこうとする現代の主流なアプローチにおいては、現象学は客観的な学問性を欠くものとして批判されてきた。しかしながら近年、認知科学や脳科学において、身体の一人称的な機能に注目する傾向が顕著となって

いる。それに伴い、認知科学と現象学の協力、相互補完関係が必要であるという主張も現れてきている。どれほど脳科学が成功を収め、その知見が飛躍的に拡大していったとしても（たとえ、「クオリアの物質化」に成功したとしても）、「当人の主観的な体験内実」の問題は維持されるものであり、その意味で一人称科学は不可欠である。したがって、認知科学・脳科学は、身体論的、現象学的なアプローチに接近したと考えられる。しかし、その一方で、一人称－三人称（質的－量的）の対立という単純な枠組みに留まっているかぎり、認知科学と現象学との間で考えられるべき協働は、本当の意味で見えてこない。近年生じてきた現象学に対する肯定的な理解は、一人称的パースペクティブの拡張（しかもそれは、一人称と従来呼ばれてきたものをはるかに超えるものとして）を要請しているように思われる。

本稿では、こうした現状をふまえて、現象学が行うべき一人称的パースペクティブの拡張とはいかなるものなのか、一つの提言を行いたい。論述の手順は以下の通りである。まず (I)、一人称的、三人称的アプローチ、パースペクティブということは何が理解され、いかなることが問題視されているのかを確認する。次に (II)、一人称的パースペクティブを重視する現象学は、その一人称的パースペクティブを拡張的に

* 〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
関西大学文学部

理解すべきであるという主張を、ション・ギャラガー、ダン・ザハヴィやユージン・ジェンドリンに依拠して述べていく。つづいて (III)、そうした拡張を、ドン・ハンロン・ジョンソンが述べる身体実践に照らして、われわれの経験の成り立ちを見直す契機として考える。それにもとづき、このような拡張は、その呼称としても、内容としても、「一人称」という用語ではもはやカバーできないものとなっており、新たに「二人称の科学」として現象学を位置づけることを試みたい。

1. 一人称と三人称のパースペクティブ

一人称、三人称とは、言うまでもなく文法用語であり、一人称は自分を指示する人称 (代名詞の文法的範疇)、三人称は、話し手・聞き手以外の第三者を指し示す人称である。これを受けてそれらの語によって学問や思考を形容する際、一人称は、当事者「わたし」からの視点・考え方・理解の仕方を指し、三人称は、第三者の視点・考え方を意味することになる。ここには、さらに主観的－客観的という対立図式が付与される。すなわち、一人称的パースペクティブは、わたしからの見方である限り、それは他者と必ずしも共有されるわけではない (もしくは絶対的に共有されないとも考えられる)ので、主観的であり、第三者的な視点は当事者から切り離された視点として、すべての第三者に原理的に共有される (もしくはそれが期待される)ので、客観的と言われる。例えば、温泉の温度は、入浴する人の好みに応じて、熱く感じられたり、ぬるく感じられたりする。日頃から熱い湯に好んで入っている人と、ぬるめのお湯に長時間半身浴をしている人では、同じお湯が適温とも、熱すぎるとも言われるであろう。したがって、当事者の湯温の感じ方、すなわち一人称的な捉え方は、主観的、相対的である。しかしそれを

温度計 (水銀の因果的な規則的反応) によって測定するならば、入浴する人がどのように感じようとも、それから独立に、すなわち第三者的に、41℃といった湯温が提示され、客観的な比較や判定が可能となる。こうしたことから、特に自然科学においては、三人称的アプローチが追求された。誰がどのように感じようとしてそれから独立に、自然の側の因果的性質にもとづいた規定を行うことによって、自然そのものの特性が捉えられるからであり、またそうした普遍的な特性を科学技術に応用することにも、われわれ人類は成功したのである。三人称的アプローチへの信頼が揺らぐことはない。

その一方で、デカルトから始まる (現象学もその伝統に属するが)「認識の基礎づけ」を試みる哲学は、絶対的な明証を、わたしの意識体験に置く。すなわち、他の誰がなんと言おうと、当事者のわたしが A と明証的に直接体験しているのであれば、それは「誤りうることなく、明白に A である」とされる。この明証を出発点にして、確実にと言いうる認識、知を確保していくのである。これは、意識のハードプロブレムやクオリア (感覚質) の問題と連関している。トーマス・ネーゲルの見解を引いてみよう¹⁾。われわれは、コウモリの生態や解剖学的機構、認知システムに関して、かなりの精度をもった詳細な知識を所有している。ここでコウモリが取りあげられているのは、ほ乳類でわれわれ人間と近い関係にありながら、活動領域や感覚器官に関しては大幅に異なっているからである。コウモリが外界を認知するのは、周知のように、高周波の叫び声をみずから発し、有効範囲内にある諸対象からの反響音を把捉することによってである。それは、潜水艦に備わるソナーに類似した認知システムである。今後、われわれがコウモリ研究を継続し、コウモリという動物種について、ありとあらゆること、捕食、生殖、特有の遺伝子的構造などをくまなく理解できた

と仮定してみよう。ネーゲルが提起するように、われわれがどれほどの知識を獲得したとしても、「コウモリにとってコウモリであるとはどのようなことか」、つまり「コウモリの一人称的パースペクティブ」を、コウモリではない人間は原理的に知り得ない。できるのは、せいぜいわれわれ人間がコウモリであったとすれば、おそらくこういうことだろう、と想像することだけである。三人称的なアプローチによって得られたものと、一人称的なものは原理的に異なるのである。当然のことながら、こうした事態は、われわれと認知機構が異なっているコウモリを持ち出すまでもなく、日々一緒に生活し、会話を交わしている他者にもまったく同様に当てはまる。刺すような痛みがわたしに直接的に感じられるならば、それは身体の生理学的状態がいかなるものであれ、「痛い」という認識が成立する。わたし自身による自分の体験の認識は、もっとも明証的な特権的認識論的地位をもち、真理 (truth) の源泉なのである。そしてそれは他者にも認められると同時に、わたしにとって他者は原理的に知りえず、「欺く」といった悪意がない限り、その明証的地位を尊重しなければならないのである。例えば、医療診断を受ける場合、血液検査ほか精密検査にまったく異常が見つからなくても、患者がどこかに痛みや違和感を訴えるならば、その後の治療方針やさらなる検査オーダーは、患者自身の一人称的な訴えに応じて検討されるであろう。患者が腰に痛みを感じるのであれば（行動観察的にそれが仮病と判断されない限り）、痛みの報告こそが明証的に確実であり、炎症反応が認められないといった生理学的事実は、二次的なものにすぎない。

さらにこのことは、現代の脳科学にも妥当する。脳科学は、客観性を現象への三人称的なアプローチに求める。例えば、ある心的状態に対応する脳状態は、非侵襲的な測定方法が発達し

た現代において、比較的容易に検証される。脳のある部位のニューロン発火を fMRI などの検査方法によって得られる三人称的データを通じて、実証していくのである。しかし、このデータが意識研究において意味をもつようになるのは、被験者の一人称的経験との対応を待たなければならない。そうでなければ、それはただ、ある箇所ニューロン発火が認められたにすぎないからである。したがってわれわれが、心的状態、意識を探究しようとする限り、そこにはかならず一人称的視点を取りこむ必要がある。意識研究は、三人称の科学だけで済ますことはできないのである。もしそうであれば、それは意識研究ではなく、脳の研究でしかないだろう。また意識研究をすることが、脳を研究することと同じであるという立場を採用するならば、なぜそれを同一視してもよいのかについて研究するために、一人称的なものを問題とせざるをえないのである。

以上、簡単に、一人称と三人称のパースペクティブの違い、それらがそれぞれ意味するとされてきたことを確認し、意識研究という文脈では両者がともに求められなければならないことを見てきた。このような動向から、認知科学においては 1990 年代以降、身体論的アプローチの傾向を強めて、メルロ＝ポンティなどの現象学的見解へ立ち返ることが主張されはじめた²⁾。またそれにともない、認知科学的な問題に貢献するものと従来されてきたのは、いわゆる「心の哲学 Philosophy of Mind」と呼ばれる分野であったが、近年では、認知科学と現象学との関係および関連について、多様な研究が行われるようになった。専門ジャーナル *Journal of Phenomenology and the cognitive science* が刊行されるに至ったことなどが、その顕著な現れだろう。では現象学は、認知科学研究において、いかなる役割を果たすことができるのだろうか。次に、一人称科学 first person science

としての現象学の新しい動きを確認していくことにしよう。

II. 一人称科学としての現象学

フッサール現象学は、世界があらかじめ存在するという信念(自然的態度における一般定立)をエポケー(判断停止、遮断、括弧入れ)して、純粹意識の領域を確保し、そこで直接的に与えられているものを記述することによって、世界、自我、他者、学問などがいかに成立してくるのかを探究する。したがって、明証的な自己の体験を記述的に解明していくという現象学の作業が、一人称的パースペクティブと特徴づけられるのである。現象学に批判的な立場の哲学からは、先に確認したような一人称的な明証性そのものに疑義が申し立てられる。たしかに、当事者の体験領域は当事者にのみ絶対的にアクセスされるものであるが、それは同時に当事者にしか知りえないプライベートなものであり、その意味でやはり客観的で一義的な基準をみとすことはできない。したがって、現象学に客観的学問性を認めることはできない、という論調である。

だがこれは現象学に対する、そして一人称的パースペクティブに対する典型的な誤解の一つである。「わたし」という当事者の視点から、わたしの意識内容を記述するといっても、そこで考察の対象となっているのは、エドムント・フッサールという個人や三村尚彦という個人の体験ではない。現象学は、徹頭徹尾、本質学である。そこで記述され解明されるのは、体験の普遍的かつ本質的な構造である。フッサールや三村がどのように世界や他者を体験しているかではなく、誰かが世界を体験することは、どのようにして可能となっているのかが問われているのである。したがって、現象学が依拠する一人称的明証は、当人以外の誰によっても否定さ

れないという不可疑性ではなく、相互主観的に承認され、また訂正されるオープンな明証性なのである³⁾。

現象学的な記述が採用している一人称的パースペクティブが、いわば超越論的なもの(体験成立の際に機能している普遍的な構造を解明するもの)であることを念頭におくとき、現象学と三人称的アプローチをとる認知科学との相互関係が、より生産的なものになると思われる。例えば、ギャラガー、ザハヴィが主張しているように、自己現象学とヘテロ現象学の相互依存性が認められるであろう⁴⁾。さらに、フランシスコ・ヴァレラは、「現象学の自然化」によって現象学と認知科学を架橋しようとして、神経現象学 neurophenomenology を提唱した⁵⁾。これは意識研究の被験者および科学者に、現象学的記述のトレーニングを施すように主張するものである。被験者および科学者は、意識研究の実験に関係しない事柄を無視して(いわば、エポケー、判断停止して)、有意な事象だけを記述することが求められる点で、自然的世界の存在を括弧入れする現象学的方法と同一とされる。Iで確認したように、意識研究は三人称的なデータ(f-MRIなどによって得られたデータ)と一人称的なもの(当人による主観的報告)とを対応させる必要がある。認知に関する実験という場面では、被験者の報告がどれほど慎重に行われたとしても、当人に「これは実験である」という意識が伴う。こうした意識がもたらす影響、例えば、注意散漫、一連の自発的思考(特に自分自身の思考によって注意を逸らされる主観的パラメータ)をエポケーして、探究領域に関する深い理解とより繊細な記述が獲得されるように現象学的なトレーニングを行うべきだとするのが、神経現象学である。ヴァレラの提案は、三人称的な実証的データとそれに関する一人称的視点には相互性が認められ、それこそを体験の特質と考える点に、その

ポイントがある。意識活動は注意散漫や自発的思考の流入などとともに進行していき、対象的なものに関わる活動が、そのまま再帰的に当該の意識活動に影響を及ぼすのである⁶⁾。以上、ヘテロ現象学や神経現象学に対して、いかなる態度で臨もうとも、現象学という枠組みにある限りは、何らかの形で一人称的なものに依拠するのであり、現象学はあくまでも一人称科学でありつづける。

さらにギャラガー、ザハヴィは、「現象学は一人称的である」と言われている見方が、一般的に狭いものにとどまっていると指摘する。

一人称的パースペクティブについて語るとき、そのようなパースペクティブを持ち、体現することと、それを言語的に分節化できることを明確に区別しておくことが重要である（それぞれを弱い一人称的パースペクティブ、強い一人称的パースペクティブと呼ぶことにする）。後者が（「わたしは怒っている」や「わたしはコーヒーが飲みたい」などのように）一人称代名詞の習得を前提し、ある立場やパースペクティブを実際に自分に適用することを必要とするのに対して、前者は単純に自分自身の経験的生の一人称的、主観的な顕現manifestationの問題である。どちらの能力も探究する価値のあるものだが、現象学者は主に前者の重要性を強調してきた⁷⁾。

現象学の一人称的なパースペクティブによって、反省する主観性の視点のみを理解しているだとすれば、それは狭すぎるのである。このレベルの一人称は、反省による対象化を受けて、明確かつ顕在的な知と呼べるものである。しかし、さまざまな行為が、現にわたしが遂行している行為となるためには、反省的な対象化は不要である。われわれはビールグラスに手を伸ば

し、絶妙な力加減でグラスをつかんで持ち上げ、それを周りの人たちのグラスに柔らかく接触させることで、乾杯をする。こうした一連の行為で、われわれに明確に意識されているのは「乾杯しよう」というみずからの意図である。自分の手を見つめ、グラスとの距離を把握し、グラスの形状に合わせて手の開きを調整するといった形で一挙手一投足を対象化することは、スムーズな行為で起こることはない。仮にそうした対象化がなされるとすれば、それは身体状況に異常が生じている（例えば、手が自由に動かないと急に感じられるなど）場合だろう。その一方、明確な対象化的意識が欠如しているからと言って、意図だけがあって、身体は勝手に動いているというわけでもない。われわれは身体をたしかに意識し、状況に応じて調整しながら動かしている。自己の身体動作とそれに連動する状況変化に対して、暗黙的な理解をわれわれはもっているのである。またこれは、身体にのみ言われることではない。「乾杯しよう」という意図もまた、その他のさまざまな思考、意図、欲求などと結びついている。それは一連の思考の流れとして明確に捉えられているものもあれば、背景的に理解されているだけで非顕在的なものもある。乾杯の直後にAさんと会話をしたいという欲求は意識的であるが、Aさん以外の人から話しかけられた場合にはその会話に応じる可能性も暗黙的に含意されている。「わたしの体験」が体験として成立し、それに呼応してわたしに何らかの現象が立ち現れてくるとき、上記のような身体的および心的な暗黙的理解がそこに含まれ、その主観的な顕現、前反省的な一人称的パースペクティブを生起させているのである。こうした論点は、すでにユージン・ジェンドリンによって詳細に展開されている⁸⁾。

したがってわれわれは、ギャラガー、ザハヴィの提案、さらにジェンドリンが述べる「身体的

および心的な暗黙的理解」という2つの観点で、一人称的パースペクティブを拡張して理解すべきなのである。わたしは自分の怒りを、「事情もわからずに他人を批判ばかりして、自分から責任を負おうともしない仕事仲間に対して、わたしは怒りを感じている」と、自分の心情を反省しながら、それを言語的に把握し、命題的な判断へもたらずのではなく、状況の中で直接怒り、それを表出してしまうことが一人称的なのであり、そこに含まれる今後の対応への暗黙的な理解、怒りの身体的な振る舞いの連鎖の不意な実行もまた、一人称的なのである。

一人称科学としての現象学、意識体験の直接的記述を行う現象学は、前反省的な自己意識と暗黙的な理解を含んだ自己意識を認めることによって、一人称的パースペクティブの拡張を図るのである。では、こうした拡張によって一人称科学としての現象学は、どのようなものになるのだろうか。

III. 拡張された一人称科学としての現象学、二人称の科学としての現象学

一人称的パースペクティブの拡張という視点は、ジェンドリンとともに一人称科学を提唱した (Gendlin and Johnson, 2004) ドン・ハンロン・ジョンソンのソマティクス Somatics の考え方にも見いだされる。ジョンソンは、フッサール現象学の有名な格率 (スローガン) 「事象そのものへ *Zu den Sachen selbst*」に導かれて、身体的経験の複雑さに注意を向けることで心身二元論がもつ問題点からの解放を提唱している。たとえばボディーワークの3つの流派、Sensory Awareness, Continuum, Authentic Movement はいずれも、事象そのものの発見能力を覚醒する身体実践であるが、それはフッサール現象学の方法である「括弧入れ」の拡張的な解釈にもとづいている。フッサールにあっ

ては、括弧入れは、あらかじめ存在するものとして無批判に信念されている世界、われわれとは独立にそれ自体存在している世界のさまざまな存在者を、素朴に哲学的考察に利用しないようにするための方法である。いわゆる現象学的還元の一つの操作である。ジョンソンは、一連のボディーワークは、あらかじめ与えられている思考や身体理解を括弧に入れることで、目まぐるしいペースで進行していく思考の流れをスローダウンさせ、身体体験そのものに注意を向け、思考と身体との直接的な結合を感じさせるものだとしている⁹⁾。暗黙的な理解を可能にしている身体機能が、強調されているのである。思考と身体は直接的につながっており、そうしたつながりを生きることで、われわれのさまざまな行動が可能となる。このような身体的次元を記述することこそが、拡張された一人称的パースペクティブを見据える一人称科学の役割と考えられているだろう。身体は、感じるもの、感覚的なものを受容する。思考は(そして脳は)、その受容された感覚を解釈し、世界を理解する。こうした分断にもとづいた考え方は、先に言及したように、脳科学において現代では支持されていない。これを乗り越えるために、われわれは「拡張された一人称的視点」を採用しなければならないのである。

しかしながら一人称的パースペクティブの拡張という主張は、それに対する明確な自覚があったかどうかを別にすれば、現象学にとって今さら強調すべき事柄には思えないかもしれない。現象学には、地平意識や身体志向性の考え方がもともとあったからである。顕在的なものへの志向を成立させるために機能している地平意識、それ自体は背景に退き、対象化されずに他のものを対象とするように働く身体志向性といった議論である¹⁰⁾。ではこうした主張は、一人称と三人称という図式を再考するために、現象学がすでに行ってきたものを自覚化し、そ

れによって新しい動きとして認知科学、脳科学との接続を試みるということに尽きるのだろうか。

ここでは、それ以上のことが求められ、かつ可能であるように思われる。一人称的パースペクティブの拡張は、現象学のさらなる可能性として不可欠と考えられる。それはこれまで確認してきた、ギャラガーらが述べた「前反省的な主観的な顕現」や、ジェンドリン、ジョンソンにおける「暗黙的な身体機能」という方向性にもとづいた見解である。しかしながら、こうした拡張が引き続き、一人称的パースペクティブと呼ばれることは、その真なる意味合いを取り逃してしまう危惧がある。というのは「一人称」という呼称が、主観性哲学のニュアンスを強めるからである。現象学が身体経験を強調する理由の一つは（特にメルロ＝ポンティに顕著なように）、身体が主観的であり、かつ客観的・对象的でもある両義性による。それは、身体と環境が一つに絡み合ったものであり、両者は相互に機能し、互いを意味づけ、互いの存在をそうした存在として立ち上げてくる。そこには身体をもったわたしが、対象である世界と向き合い、意味を構成するという静態的な関係は見いだされない。ダイナミックな環境的相互作用のなかで、身体、世界、わたし、他者が同時に立ち現れてくるのである。こうした機能的な関係こそが、これまで言われてきた拡張された「いわば一人称的」なパースペクティブである。それは一人称的であって、もはや一人称ではない。これは、お互いの息づかい、まなざし、言葉遣い、振る舞いの中で二人の関係が現象し、お互いがお互いを承認する（場合によっては否認する）存在となる二人称の関係と呼ぶべきものではないだろうか。これは他者との関係に限定されず、事物にまでおよんでいく。われわれを取り巻く道具、物質的事物は、われわれの存在を意味づける。同時に、われわれの意図、身体、感情、

その場の雰囲気、道具や事物を意味づける。われわれは事物との間にも、いわば「わたしとあなた」という関係が成立している。経験の主観的顕現は、徹底的に相互作用に委ねられているという点で、二人称的という次元まで拡張されているとは言えないだろうか。

通常二人称と語られる関係まで一人称的パースペクティブに含めることは、現象学に何をもたらすであろうか。われわれの身体の運動が意味のある行為として理解されるためには、環境との相互作用が必要であるが、それは環境、事物との応答関係であり、承認や拒絶といった交流関係をもっている。

私の体から繰り出される運動が意味あるものになるためには、その運動を拾って応答してくれるモノや人との身体外協応構造が不可欠だ。－中略－ 運動は、それ自体で意味を持つのではない。拾ってくれるものがなければ、運動は意味もなく空を切ってしまうのである。¹¹⁾

脳性まひの当事者研究を行う小児科医、熊谷晋一郎は、車椅子から降りて床に横になり、もぞもぞと身体を動かして、這いながら室内を移動する様子を詳細に記述している。それは、われわれの身体がその動きを意味あるものにするために、環境的なモノとの存在の間に多様な交流が必要であることを示している。こうした記述は、身体がたえず暗黙的に機能して、環境と応答的な関係を取り結んでいることに焦点を合わせることによって、遂行される。われわれは無造作にできてしまう行為を基準にして、場合によっては（それができることが当たり前であると暴力的に）規範にして、環境、身体、思考を3つバラバラに要素として考えてしまっている。しかし自分が身体化された自己として安定的に統合されているという意識が成立するため

には、他者とはもちろんのこと、事物とすら「わたしとあなた」と言うべき関係が結ばれなければならない。スムーズで円滑な行動に多くの事象が関与していることに気づくために、拡張された一人称的パースペクティブを、二人称と言い換えるべきではないだろうか。それゆえ、拡張された一人称科学としての現象学は、二人称の科学¹²⁾ とならなければならないのである。

結びに代えて

簡単に議論をまとめておこう。一人称的なパースペクティブと三人称的なそれとの対立的な理解から、学問の客観性を保証するものは、三人称的視点であると従来されてきたが、近年の脳科学における意識研究は、再び一人称的なアプローチに接近するようになってきた。身体が状況を知っているという認知的な側面が重要視されてきたからである。そのため、認知科学・脳科学と現象学との協働関係が目ざされてきた。その際、単に従来の一人称的なパースペクティブを復活させるのではなく、前反省的、暗黙的なレベルを含んで拡張的に理解することが求められてきた。それは、前反省的な自己意識、暗黙的な理解を含んだ自己意識こそが、われわれの体験や行動を成立させるために重要や役割を担っていると考えられるからである。こうした拡張された一人称的パースペクティブの議論において、本論考では、環境、身体、思考の相互作用をより精緻に記述するためには、一人称という言い方をあえて廃棄し、二人称科学として現象学を位置づけることを提案したのである。

ここで「二人称」という言い方は、きわめて拡張的に用いられている。すなわち、一人称的パースペクティブを拡張して理解するために、いわば意図的、戦略的に「二人称」という術語を拡張して使うという提案を行っているのだ

る。一人称的パースペクティブは、われわれが「いつもすでに、あらかじめ」生きてしまっている次元、いかなる意味でもそこから引き離されることのない生の次元を意味すると思われる。しかしそれを語ろうとする理論的な営みは、これまで一人称-三人称という既成の枠組みに影響されて、一人称的視点を限定的にしか見てこなかった。理論的視点というファクターを完全に取りのぞいて、生の次元を捉えることは原理的に不可能であるが、少なくともそうしたものの介入にセンシティブであることは必要だろう。生、体験を記述し、一貫してその次元にたちどまろうとする一人称科学、現在、われわれに求められている一人称科学は、その射程を広げることで、記述の木目を細かくしていかなければならないだろう。

注

- 1) ネーゲル『コウモリであるとはどのようなことか』1989年を参照。
- 2) Gallagher and Zahavi, 2008, p. 5 (邦訳7頁)
- 3) 一人称的記述の相互主観的承認の議論は、Gallagher and Zahavi, 2008, pp.13-28 (邦訳19-43頁)を参照している。なお、超越論的な議論ではないが、こうしたレベルにおける記述の典型例を一つ挙げておこう。自分の声をボイスレコーダーなどに録音して、自分で聞くという体験は、だれもが一度はしているだろう。レコーダーから聞こえてくる声は、自分の声として認識しているものとは異なり、居心地の悪さでも言うべき感情が伴う。「これはわたしの声ではない」と言ってみたところで、周りの人々は、いつものわたしの声だと指摘する。録音されたみずからの声を聞くという体験に関して、生理学的な説明はもちろん可能であるが、われわれはこうした違和感を伴う体験成立について、普遍的に、共有される形で語ることができる。現象学の記述とは、このような相互主観的に承認される一人称的記述なのである。
- 4) ダニエル・デネットによって主張された、主観的データを平均化する方法論であるヘテロ現象学は、三人称的なパースペクティブによる意識の科学的説明を成功させるために、被験者のインタビューを通して、公的に観察可能なデータの解釈を行う。ダニエル・デネット『解明される意識』山口泰司

- 訳、青土社、1998年を参照。ギャラガー、ザハヴィによる自己現象学とヘテロ現象学の相互性については、Gallagher and Zahavi, 2008, p.28 (邦訳43頁)を参照せよ。
- 5) Varela, et al.1992 (邦訳『身体化された心』)およびVarela and Shears,1999を参照。
 - 6) 卑近な例で言えば、「緊張しないようにという思いが、人をより一層緊張させる」といった再帰性である。この再帰性に対して、神経現象学は、エポケーという現象学的方法を用いて対処しようとしているが、むしろ、そうしたあり方をそのまま記述し、それに関与する三人称的データとともに包括的な理解を目指すという方向性もあると考えられる。それを筆者は、フォーカシング指向現象学として構想している。2012年11月18日開催の日本現象学会第34回研究大会ワークショップ(東北大学)「感じ、記述すること-身体の現象学とその方法論-」における提題「フォーカシング指向現象学の可能性」を参照されたい(『現象学年報』29号、2013年11月刊に掲載予定)。
 - 7) Gallagher and Zahavi, 2008, p.47 (邦訳68頁)
 - 8) 一人称的パースペクティブのこうした拡張を、フォーカシング指向心理療法を提唱したジェンドリンは、詳細に論じている。ジェンドリンが主張する一人称のプロセス、一人称パースペクティブは、Iで確認したデカルト的なそれ、すなわち、わたしにとって明証的、つまり明らかで誤ることのない体験領域のことではない。むしろそこで明証的ではない暗黙的implicitなものがさまざまな仕方で作用している機能領域を意味する。「一人称プロセスは、わたしが『暗黙的理解』implicit understandingと呼ぶものを含んでいる」(Gendlin, 2009, p.333)。一人称プロセスは、明確な言語的理解に先立つ暗黙的な機能を有したものとして、より広く捉え直される。ジェンドリンは、より広く捉えられる一人称プロセスの具体的な機能を生き生きと記述し、さらにそれにもとづいて、新しい学としての一人称科学を提唱しているのである。ジェンドリンのフォーカシングを知っている人には、暗黙的なものが身体的に感じられるフェルトセンスであることは言うまでもないだろう。合わせてGendlin, 2012も参照されたい。
 - 9) Johnson, 2004
 - 10) フッサール地平的志向性とジェンドリン暗黙的理解の比較考察については、三村(2011)を参照されたい。
 - 11) 熊谷(2009)、164頁。そのほかには、アスベルガー症候群の当事者による当事者研究、綾屋・熊谷(2008)も参考になる。綾屋紗月は、外界からつね

- に大量にもたらされる情報から必要な情報を絞りこみ、いくつかのカテゴリーとしてまとめあげることが、ゆっくりであるがゆえに生じる感覚過敏、感覚飽和を論じている。「私は音で周囲を見ているといってもいいくらいに聴覚であらゆる情報を取りつづけている」(綾屋・熊谷,2008,p.62)、「私の目はたしかにモノを映しているはずなのだが、どうも信頼できないという不信感があり、耳できちんと状況を把握することで、見えているものの実体を確認したいと思うのである」(同書, p.177)。視覚事物を見るときに、われわれは音や匂いも同時に受け取っている。それらは当の対象に限定されるものではなく、その全体的な環境から生じている。それらが身体と相互作用することで、対象を視覚的に捉えるという状況が立ち上がってくる。一般にはその際、情報の絞り込みとカテゴリーのまとめあげがスムーズかつ瞬時であるがゆえに、まとめあげられた感覚とそれによって認知されたものだけが、対象となる。しかしそこには暗黙的に多様なものが関わっていることを、当事者研究は教えている。顕在的なものが存在するためには、潜在的、暗黙的なものが非対象的に働かなければならない。
- 12) 本稿のもとになった2012年10月6日に開催された日本トランスパーソナル心理学/精神医学会第13回学術大会シンポジウムにおいて、ドン・ジョンソンもまた「二人称科学としての現象学」について言及した。内容的に異なる部分も多いことは事実だが、二人称という視点をいかに取りこむべきかという問題意識は共有できているように思われる。

参考文献

- Gallagher, S. and Zahavi, D. (2008) *The phenomenological mind: an introduction to philosophy of mind and cognitive science*, London, Routledge (邦訳『現象学的な心 心の哲学と認知科学入門』、石原ほか訳、勁草書房、2011年)
- Gendlin, E.T. and Johnson, D.H. (2004) "Proposal for an international group for a first person science" New York: The Focusing Institute
- Gendlin, E.T. (2009) "What first and third person processes really are". *Journal of Consciousness Studies*, 16
- Gendlin, E.T. (2012) *Implicit Precision*, in Z. Radman (Ed.) *Knowing without Thinking: The Theory of the Background in Philosophy of Mind*, Basingstoke: Palgrave Macmillan

身体による「一人称的パースペクティブ」の拡張（三村）

- Johnson, D.H. (2004) "Body Practices and Human Inquiry: Disciplined Experiencing, Fresh Thinking, Vigorous Language" , Hampton Press
- Varela, F. J., Rosch, E. and Thompson, E. (1992) *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience*. Cambridge, MIT Press (邦訳『身体化された心』、田中靖夫訳、工作舎、2001年)
- Varela, F. J. and Shears J. (1999) *The View from Within: First-Person Approaches to the Study of Consciousness*, Imprint Academic
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎 (2008)、『発達障害当事者研究 ゆっくりていねいにつながりたい』医学書院
- 熊谷晋一郎 (2009)、『リハビリの夜』医学書院
- トーマス・ネーゲル (1989) 『コウモリであるとはどのようなことか』永井均訳、勁草書房
- 三村尚彦 (2011) 「志向的含蓄と体験過程－フォーカシングという現象学－」『アルケー』19号、関西哲学会編